紀伊殿

水戸殿

松平讃

内閣文庫
番號 和 16321
冊數 22 (3)
函號 157 128

内閣文庫
和書 類
一二三三二 號
二二 冊
三五七 函 四 架

国立公文書館
National Archives of Japan

譜牒餘録
三
四

譜牒餘録巻第二
紀伊殿

国立公文書館
National Archives of Japan

熊野
新宮衛
一 権現様ゟ御祈祷之御札并矢根差上候
江加下ゟ御内書不被仕候写
祈祷札并矢根二百本到来悦思食候
酒井雅楽頭可申也
九月廿八日 御黒印
熊野山 新宮

藏書
日本政府圖書
内閣文庫
淺草文庫
国立公文書館 National Archives of Japan

一 権現様より於甲州当社領御寄附之旨
被成下候 御證文所持仕候写

熊野新宮
三方社中

甲斐國之内熊野領之事
右如前々領掌不可有相違之者也仍如件
天正十一年
十一月十日 御諱御判
禰宜孫次郎殿

一 権現様より巻数差上候処被成下候
御書所持仕候写

那智
實方院

於御前御祈祷巻数并牛王頂戴候
殊料紙送給本望候 猶雅楽助
可申候 恐々謹言
十月廿日 御諱御判
熊野山
十方院
御返報

勢州白子
観音寺

一 台徳院様より当寺領御寄附之段被成下候 御朱印文写

伊勢国河曲郡江島村之内参拾石事
如先々可令寺納者也

元和三年九月七日 御朱印

白子
観音寺

一 大猷院様御代替ニ付被成下候 御朱印文写

当寺領伊勢国河曲郡江島村之内三拾石事任元和三年九月七日先判之旨永不可有相違者也仍如件

寛永十三年十一月九日 御朱印

白子
観音寺

一 厳有院様御代替ニ付被成下候 御朱印文写

伊勢国河曲郡江島村之内三拾石事

但元和三年九月七日寛永十三年
十一月九日任先判之旨當觀音寺
全收納永不可有相違者也
寛文五年七月十一日　御朱印
右御證文共三通所持寺領
只今拜納仕候

御書并御證文御褒美平常之衆上ゟ家礼
先祖頂戴仕候者書付

板坂意謙

一権現様江五世祖板坂法印卜全薬差上候付御感被下候　御内書一通所持仕候

権現様より御知行或御加恩先祖江茂並御朱印御墨印之御悦文頂戴所持仕候処

芦川甚右衛門

山本傳左衛門

三上甚太夫
蔭山角兵衛
深谷平八
尾嵜平左衛門
渡邊六郎左衛門
薗田伊兵衛
佐野傳兵衛
竹元茂兵衛

佐野伊左衛門
桑生理左衛門
加納兵右衛門
小笠原十郎左衛門
鈴木四郎兵衛
小幡源右衛門
天野孫惣
大藪新右衛門

渡辺又右衛門
加納角兵衛
渋谷治郎九郎
下条安右衛門
筧四郎左衛門
尾崎甚右衛門
赤穂孫右衛門
山田八兵衛

金井飛之助
佐野新三郎
大草小五郎
長坂小右衛門
川小紋左衛門
三浦権七
諏訪新甚左衛門
小笠原彦一

毛利千壽郎
三浦傳八
油比久左衛門
大屋勘三郎
都築源之右衛門
芦川半之清
間宮助左衛門
飯島源一郎

畔田半右衛門
鴻巣一郎大夫
葛西虎次郎
近藤久内
佐野楠之助

台徳院様御代替之
御歩行手元以来武法於御城役
御知行二百石只今迄不相替
竹田慶安

有馬彦八

一 権現様江曽祖父有馬大炊時貞儀鉄術
御当家江仕候参州ニ而初而鉄術奥儀
台徳院為御褒美御腰物青江拝領所持仕候
大炊相果候以後嫡流断絶故ニ庶流有馬
喜兵衛秋重 彦八父 右之節目録致候 正寿
伴之奥儀御当ニ御伝授仕候

飯田甚三郎

一 権現様駿府ニ被成御座候節飯田甚三郎
御鷹役相勤候御当家公儀仕候御徒ニ而備前
師景刀一腰被下置所持候

一 元和二年三月右甚三郎事ニ而終御当家公
仕候 御徒ニ而 御前於金被為頂候

長坂茂吉

一 権現様遠州相良ニ御鷹野ニ出御之節

親長坂茂吉正家ニ　上意を以御鷹師被
ニ被為拝御目見鷹匠ニ被相勤候ニ依之為御褒美
御羽織被下置候
　　　　　　　　　飯田茂左衛門
一権現様江戸ニ被成御座候刻親飯田茂左衛門
御鷹役相勤甲州出馬之節より出勤居
江戸ニ罷上候節為御褒美裏附之
袷被下置候

　　　　　　　子　宗佐
一台徳院様ニ曾祖父子少唐香箱差上候
節被下候　御内書一通所持仕候
　　　　　　　石黒傳一
一大猷院様御代私儀　上覧ニ被掛刻附拔
白銀被下置候
　　　　　　　田宮三之助
一大猷院様御代親田宮平左衛門居合

上覧之節剣時服白銀被下置候

木村兵九郎

一大猷院様御少年之御時より柳生但馬守
剱術御指南仕候祖父木村助九郎儀
但馬守ニ相随出御之節太刀打并御儀之度ニ
時服白銀被下置候其後御前兵法
仕合候御付太刀相勤候刻御稽古之
上意ニ而時服白銀被頂戴候

久野丹波守家礼

落合六左衛門

一権現様遠州中泉江御鷹野ニ
出御之刻毎度久野丹波守方より家礼落合
利兵衛六左衛門祖父儀罷出御案内仕候慶長十五
年霜月御鷹野之節為御褒美御召木綿
弐疋被下置候

覚書

故安藤帯刀物語

故水野左近物語

国立公文書館
National Archives of Japan

故安藤帯刀物語覚書

一天正十二年小牧御陣の時小牧山ハ太閤より取らんと被思召候 權現様早先ニ陣取給ふ故太閤御取落給ふ事也 同月九日ハ太閤より秀次を大将として池田勝入父子森武蔵守堀久太郎等岩崎辺より三州へ指向中入して岡崎を取らんとの評議あり其時武者方より告来るにより紀らは御人数

を出し給んとて先小牧の陣ある居けり
酒井左衛門尉石川伯耆守本多中書を
以御付此地大切の所なれハ堅く可守由
重々御念入たる上意也扨御先手の衆ハ右
の朝長久手にて秀次の備へ押付合戦を
始め秀次敗軍味方此勢ひニ乗て追撃す
猪入ハ先手ニ乗てハ岩崎の城を取詰攻落まて
久太郎ハ二乃手茂手ハ不合して居ける所ニ

跡より秀次敗軍を見て返り敵追来る由を聞
引返して立合て相働き味方九人数ハ逃散敵
を長追し備ばらばらに成て追かゝる處を敵ハ
あらすまて御出馬なされ味方備を立
方々へ敗北て敵ニあいきれひまなく久太郎を
追来れり
権現様御旗なれハ此勢を川奥し山陰より
敵の向へ押出し御旗馬印を押立給ひ近付ハ

敵多きをみくびらんてすゝみ始る敵寄る
此窪にて水たまりなとある所也敵味方皆
ふりこし合くいまだ懸らぬ味方は鉄炮御旗
本より弐段に備へて山の尾崎より打立
ける安藤彦兵衛直次（後号帯刀）御側に有けり
けるこの中根あまたなる鉄炮此方へ引向け敵に
指向打ははゝ可然と云上しかは尤と上意
早く此旨申渡へしとの御事にて使

を遣しける面々手前の鉄炮指出候
なを是をさへんと云者有て守よ是ハされけるハ
漸く鉄炮打候半る所に敵兵の中陣より
打せけるハ案のことく敵兵に難儀して軍中
動揺し次森武蔵守も鉄炮に中り顔をそむけ内敵味
方は勢ニ味にきおひ立たせ代ハ崩門ハ安堵といへ
ともいまだ戦ハ始まらす本陣際にさゝへ居
る所御覧せられたや急速に御下知有ける

ともに從容易ハあらさりし所ニ御先よく
平松金治郎走出鑓を入合候ニ而平井金治郎
も除鑓入先よりいつれ遅しと思ての働あり武辰
御馬の先ニ進むてかせきけれ共僅十四人
なりしと此内荒尾平八郎ハ早とかく甲敵地を見る
小手貫常る武者ニ而甲首鑓詠むと進み
ける處ニ女多八蒔傍よりかけい出彼手貫
小塚か々甲乘進ハ荒尾平八郎ハ先へ進むハ荒ら

討ち敵を森武蔵也故小高き所にて是毎云
乃武者二十人斗かゝ陣り居る所へ荒尾平八郎
鑓以てつきちらし續て味方此寄おとかる
と見く黒迫ける是其乃武者共ハ和ら
き退く總要小体几ニ纏をかけたる武者
荒尾平八郎をみて世の其進めと云て立あつ執雲
鑓荒尾平八郎走か々甲実倒して首を取むと
思ふ所ニ長田傳八郎 梅冬 永井 右近大夫 来て武

左に乗ける処に二三人進て寄来れハ
荒尾平八殿抜て傍の首を取せける此
武者池田勝入也夫より荒尾平兵衛先へ進む
処に井伊万千代兵部少輔老と組て居る
殿見て詞をかけ又合する内に万千代卓
なく組ぬるを見て手速ハ助ケ小不及荒尾平ト
けるハ人数を討りたる其自身ハ帰ハ
平井也跡乃人数を集めし手速なとて指先へ

進む池田庄九郎ハ勝入の討死を聞て
居し馬上より飛きたるを荒尾平八郎家
落し首を取夫より鑓先へかせさけるに
鑓を打折て手速ハ味方の者の鑓をとりて居
けるに向ひて鑓を借れと云しけれハとも
かゝ之す其にハちら味方乃庄蔵を一乱巻
討の事とみせる故荒尾平八彼蔵をして討
為此刀を取かへ鑓を家に其へよとく刀と

継せ云話て延む兵ハ物討にる歟又刀にる
残らすれけるなり表白幕を出にする歟
まかせらく又一人討れしなり

一

小牧御籠居乃廃軍に治部殿を無人詳
思ひける中にも多中書を今朝苦
鉄炮の音聞えてより久しき事なく治部殿
の左右なきは人評なし深傷し給ひ
皆討死にも程たる事に小牧の御籠居

堅き代備付といへとも
上に御大事に及給ふ事なれハ事に寄
たとひ堅固に御籠居仕りてハ兼而給ふ所
給御悦哉幕ひ可有とて僅人に操されす
立く行故大閤ハ味方乃敗軍を聞いて七万人
数を引具し楽田を出龍泉寺を過しく
押行処に中書手勢を引連走りしと下
知しく大閤乃陣に相並押太閤ハ山

よせ戦には通中書も馬をのりすて鑓を押ける
か敵乃大軍にかけ入勝色を見しまゝは此方
より仕かけんとの事なる処を祢暇に
事ならさりしは離陣ありくは各よき討死のかたなり
けるとも中書か換様されは誰向く可討と云
先は無用なれ共是ある中書は何事をもなく押
返合戦絶て　権現様は小勝へと同る勝手
而へ条りかひ　御前へ出られけるは思しく乗りし家

とく御感なり出入数は方々へ追付可
ありし所来集御馬廻おち都ありける中書手
勢まくかくひ生て小勝へ入給ひけりし此人
数もの身に大世集る義にく又御評議
ありく太閤ニ家来何小早く小牧へ御陣替
て御とり事まくたや潜まで中牧へ御越なり
故太閤は龍泉寺山へ押上て見給ひ小味
方の先手此人数一人も不尽へさりけり是は何

手迄も力戦被致し處也　権現様其
御機利を被為御覧ゆへ小幡へ引取せられ其
の陣所を御聞被成しより左候ハゝ小幡を
可被囲とて先人数を指向られといへとも
ちや小牧へ御移り其日比度々御戦かなく
元よりとて夫より後へ引取りしと也

故水野左近物語　男平右衛門範之

一　永禄三年五月十九日尾州桶狭間といふ
信長今川義元と合戦の時　権現様も
今川味方にて大高城を御守り被遊候
桶狭間の合戦にハ御遅れ被成義元討死左近ハ
岡崎へ御入城なり水野右衛門作正重後号左近
手後　権現様へ仕へ其頃桶狭間の戦よ信長

此時方水野か出る旗本にて名乗ル十六人衆
此節も此一番首武夜軍切ありけれハ御尋有
付て留まる石仕らせ了也

一 永禄六年十月参州一向宗一揆起り家人
歴々乃坐多く一揆ニ與しけれハ
権現様毛を御退治ありため数度の御合戦
ありし翌年正月三日小豆坂の戦ニ於て見苦
しく御旗本ニ 御旗本ニ御作して御合戦の

出ても立ち候事多く聞すへしと敵中に立退
一揆方へ加わるもあり然ルに御身ハ今日ハ大切
なる御合戦也と手出乃卑怯を悟り今日の戦に
我君の討死せハ忠なれ志ハ後ハ頼みて切て
我等も向ひて二世迄此忠功有へしと申旨也
故戦場に臨く味方ハ出見候ハ石川新七
其人真先ニ進み来り新七を水野勘左衛門
有実か先て云けるハ勘左衛門度 懐 号和泉守

日比ハ主君の為ニ一類とかためし候へとも今日ハ
敵となり戦場にて出合申ことに一騎当千の
ごとく実合けるか惣名誉をつきぬ如く
討死兼六よりハ古郡作向ひ勝負すへしとて
葉をかけけるハ兼六ハ弓箭門に生せし兵
とおもひ討取さんとてかゝるに古郡作も
跳を掛けつめけり既に間近く立なおり
何方よりともなく流矢来り兼六か腕に

立兼六いちさをすて矢をかなくり刀を抜き
て古郡作一騎実へ候とも是迄さ様にいひし
高徹らせて兼六ハ則古郡作か胄の緒を切ける
か胄脱しして古刀はし峯まで切
ほく古郡作も騎をすく刀を抜き合て
終に兼六いを切倒しけるハ倒なから世の様ハ
無念なりといひ念仏唱へ我魂を
弁済まて新七兼六ハ討候ハ一撃にて

敗北し若追討ありし節ある故右衛門作ハ首を残
御前へ持参し候ハ　上意にハ右衛門
菊を八海討ちける武者の海とハ一代の大功なり
皆大小御称美有りし也

一　永禄十一年十二月より今川氏真ハ武田信玄
に駿府を追落され遠州懸川城へ入り籠り候の間
権現様翌年正月十七日御馬を出され
攻給ふ其二日味方の勢攻入時信長の内

日根野織部が甥日根野弥吉と云者籠
城して有けるが二の丸を出て先を島にて
右衛門作弥吉を見付け弥吉申けるハ其
方ハ　家康の内にて名ハ何といふ者ぞ
某ハ日根野弥吉と云て　家康も能
知り給ふ者なり海某が頭を取りて褒美に
入れと言ひ会見状也右衛門作も組
右衛門作是を組みふせ頭をかき落し立

あまつさへ残敵一人も持たざる所
をして右府公の勝の所残将家源氏が
追とれ少とつくしして引返
権現様岡崎右左山清林としぶ森林の際
御前へ召連候の様御尋有しが命を
とうして此度右府公の命を受き被下
藤治せると　御感切の　上意せ千坂和儀に
なりと氏真城を拜かけしとなり

一
元亀元年六月廿八日姉川合戦に
権現様信長への御加勢として出られ柴
朝倉と越前勢に伝て此勢は浅井に向ふ
変に先手二度切立られ旗本まで敗軍に
相成候　権現様朝倉を討破て玉ふ
尤信長の勢もかりて居し候に浅井も
敗軍をしなり故軍後に信長は一騎
まて　権現様御旗本へ馳来今日の御働

利ハ偏ニ御武功によつて也乾坤感謝せられ進
且御家中の者武勇ヲ進しむる事
常々ニは聞及ひしといへとも今日はしめて眼
前ニ見給ふ也扨て能働きけるかなと弥称美
せられ進し也此皆右衛門作か力大切て敵乃
冑の鉢を切割向ふ甚よく切付ける此刀
を水野下野守所望なるニ付遣へしなり其後姉川
信長此手ニ入姉川合戦此礼謝として
安土ニ於て　権現様を招請せらる饗饌
[illegible]料理[illegible]せられ[illegible]しとの名
ニ付頭分の内ニて五人御小姓の内ニて五
人は石連右衛門作も御小姓五人の内ニ撰
之進し御供ニて　権現様御出座御食過
出て後信長出座十人侍供の者ニ姉川
みくし比類なき働しけるよし称美也
其後酒宴になり信長の給ひけるハ

家康へのおてなし小林茂青やある也
せとの旨也其時大なる三方にかりそ栽茂
浅井か首を塗漆にぬり眼にハ珀を入たる
をすへ大土器成添く
権現様乃御前に壺池田紀伊守へ出
識に是ハ目出度御肴なり私たへて来ら
せんとつ判盃を勧く
権現様へ寄せける酒宴安保其をさく

信長岐阜へ帰りし也

一

元亀三年十二月廿二日於味方原武田信玄
と御合戦乃苦戦既に始まり御旗本を以く
三度迄く敵陣を打破り給へとも敵大軍
なれハ味方終に討負　権現様浜松城へ引入
給ふ敵跡を慕ひ追ふるなく手来里
あるる右衛門佐数度取て返し戦して悉
なく浜松城へ引入　上意にハ一日に七度

此捷と云事皆及給ふ今日の右府依か勧ハ
七度の捷と云とも中々及ひ難き所にあらさりしと
御幸ハ法録第一に可申しとなり

一天正三年五月廿一日於長篠武田勝頼と
御合戦乃時　権現様への加勢として
信長父子出陣し給ふ信長於ても
武田家中ハ者ハよく馬を乗敵陣を乗破
るよし皆及まりさらハ手立をせよとの
評議ありく味方の陣乃前に数十重
堅く柵を付られ候　権現様へ給ひ
候ハ武田ハ年来此敵あまた度此度年
之残遂むとて深入せらる屋に多く討死
あるし給ひてハたとひ此軍に勝ても詮
なき事也不詮今日ハ備よくなりふ構ハまて
此家ハ柱を立給へ所机ハ勢を禄至
わきらくにしとく足並中さむと也敵ハ川

を渡りまくり懸り来る味方ハ並面の溝を越ハ
柵此外へ足軽を出し鉄炮を打せ敵強く
寄る者来時ハ柵の内へ引入敵を寄被んとそ
来騎三千騎程ハかきを楯柵ニ寄かゝりそハ
為方なくたゝよふ所を引付鉄炮にて五騎
十騎つゝ打落しけれハ案の如く敵陣
あくみはてたるくみへしに信長軽く付るハ
勢ヲかゝれと下知し給ひけれハ信長の勢

一
権現様乃勢一同ニ懸り列付被て追討
尓しけれハ皆右府御軍功あり誰ある也
なか秋寺門跡信長ハ敵對天正六年摂州
有岡之城主荒木摂津守一向宗なるにより
門跡ト一味しく居城ニ楯篭るニ付信長
より先方見仙千代等残を攻信長ハ
彼表へ出馬乃帰　権現様ニも十七
五騎か勢ニて出馬ありて尾脇ニ押寄ける

爰に江州甲賀の者共籠城して有けるか
信長へ反忠の内通して曰城へ入らは忽
攻おとし可申城を破る處也と議せられ万見
仙千代我先陣として攻寄る處に
彼甲賀の者共反忠露顕し相圖も違し
ける寄手ハ是非不知内通乃者と思ひさく
と塀際へ寄かゝる所に右衛門作一番に寄
むとし塀柱に手をかけし處に城中

より付ふとひくく頭の骨を肩先まて射
徹す右衛門作猶塀柱に取付居けれハ敵是
みてあらき振舞かなとて上より立臼を投
かけれハ右衛門作則塀乃底へ打落さる運命や
はよかりけん水のなき所へ打落され絶入
して有けるを後に陣所へ舁の者見付
脇の小口の中へとかし温なる湯へ矢残
ぬき其矢残を洗せなとさせ看病しけれ

よ屋ノ跡ニ後ヽ旗ヲ立ケル所ニ右衛門佐
ニ續ク水野藤次郎都筑藤右衛門尉ニ付
合テ安人共ニ鉄炮ニあたりて忽討死
有ル仙千代モ討死ニアリシ勢ヲ北ヘ取シ
ト也

一 天正十二年四月九日長久手御合戦の時
初乃合戦ハ御先手庄討勝三里ニ而追討
シけ而ニ後此合戦ニ味方討負又二里ニ而

追返され　蜂蜆極ニ跡ニ重御押ニ被
先手此軍出法印弟思白高木主水内藤
四郎左衛門安人ヲ相見ニ付ハさる四郎左衛門
味方此負ヲ見切て票候りけれハ先手ハ
出向との御尋有り四郎左衛門申上るハ味方
乃勝軍也是より早く参州へ御陣取へと
申候兔角の仰もなく法然ハ先き二被遊ニ
内ニ高木主水モ東切て帰る又先手ハ

如何と御尋有けれハ味方勝軍なり早く
御出馬被成候へと申上る時本多佐渡守申ける
主水ハ何とて無卒尓なる事哉と申けれハ
御勢を以て大軍を敵ニ御出馬候ハむ事能る
為ニならさる儀なり主水申ごとく味方ハ軍
の道ハ存すまし大将の出馬せらる事なり
疾く御出馬候へと申す主水か申様尤ニ思召
さらハ御出馬有むとて出人数くハ御出被成

しにかゝり御小性衆に十人并鉄炮衆
扨ハ甲州者かはこの里なり并伊賀衆十人
の御鉄炮衆を御先手とせられけれハ御馬
廻里にまりかき出へ出家中乃者の若党
なとに御供仕らせけるよし扨御旗を戦
場へ押られけれハ敵も志らむて追留里あり哉
出鉄炮衆底不知して志ハらく鉄炮をう
ちも敵多く打落す千角有り大将出みへ

黄る武者一人指物にさいはい白き紙ぬきし
乃羽織を着し歩武者四五十人左右に立
諸勢よりハ六七間ほと出て下知をなす
右衛門作か足輕是をみて彼武者を本藏さへと
申ける間右衛門作乃出向にましして本藏せ
しかいひきる処して其武者を本藏す
四五十人乃歩武者驚きかこむ後陣へ引
入しつをまきすまり敵陣騒きハ立旗色乱る右衛門

此時山乃尾崎より唯一騎乗おろし敵陣へ
乗込千々に下知して御馬道乃半分越ら
を拾ひハ流れ道に一同に馳かゝりけれハ敵勢
敗軍して池田備入乱れて討取し也
右乃白羽織着したる武者ハ森武蔵
殿也しかも此戦に下知し給ふハ敵を討取
并首持来ハ無用也皆々討捨に仕れよと
しけハ耳鼻抜きとりて可帰由是ハ味方

別而御勢太の道ハ首をおさへんとせし戦
の時ハなからむとの事也数軍はて是非し
て御歸陣可有治様御能しして宣ひけれハ今日
此先かけハ大久保治右衛門なり抜群の働
とれ御感也幸附有部作 御前へ立て思ふ
拙不審なり 上意かなきそれハ其事よ
くて為との旨と存しけ道とも聞き候
大道ハ幸道よく出ぬそ道より小幡小牧へ

次第小川氏世治小平後小牧より抜て長久手
高名の武治食践あつて鉄炮の者共働と
御出よ皆せられ幸長又長久手此先かけハ
大久保治右衛門より外ハなきと重而
上意也幸附有部作治右衛門と向て申拙き
方常乃者なれハ申にハ及ぬ事なれとも
度〻此武功なれ共 上此御尾張衆
幸にしく勝事ハ幸方よりハ似合ぬなり山

乃尾崎より乗おろしたるハ其より外ハ
なし右方ハ渡邉弥三郎と二騎下乃津よ
ひかへ居たる也其て乙命盡はて 此覧ちろ之
乃事是非に及ぬと申ける 右段皆右
兎角乃作儿なき間に渡邉弥三郎申拈
右郎作か申さいらく上乃尾崎より乗おろし
当るハ右郎作也源右衛門と其ハ下乃津より
乗也さりと右郎作に当る事にくハ無此座

ひつ右 上よ作せら軒くハ右郎作ある由云
上す右府 上意よ云く家尼違也右郎作
ハよかき申よる安要細に作まけらる太
郎作申拈一真於至極なる 上意此上は
兎角申に及ハす能大次右衛門ハ不似合儀を
申け述ハ浅井右衛門尉そ於浩家老中只今
の 上意れ上ハ兎角に及ハすと申けれハ
右郎作ハ不有不存このひし也

一同年六月十二日尾州蟹江城主前田与十郎
逆心致合瀧川左近を城へ引入家の臣
権現様より当日早時ニ御夜懸ニ攻成
此時味方勝て大手乃門際まて攻入突に
古部作の前ニおゐて味方三騎鉄炮ニ当て討
死す古部作も死骸を一番ニ乗込て首級
取御前に持参しけれハ上意にハ其身か
高名の事ハ孫ニつらへ今日乃立柄こそ見

事なれと感涙宣ふ其時古部作曾孫を
披露けれハ御前にて将立置ハ辞けく
子も何其頭乃右の手を継されしよ裏かくも
有し事也同七月三日瀧川城主与十郎を
斬て降参して逃去しと也

家礼先祖勧之書付

国立公文書館
National Archives of Japan

桑田市十郎

一 元亀三年十二月　権現様遠州味方ヶ原
御合戦之刻高祖父桑田作左衛門被供奉献
一人付被候ニおゐて場当座之為御褒美御
持弓一張御筆之手跡添候得共被紛失
御筆者今所持仕候此御筆明中ニ　御諱
近習之書付有之候　此品家来之者献乃陰服指被分被置今有之候

右者御書付御感状等所持不仕候得共傳来
無之候得共御戦場ニ而供奉仕武功諸将ニ随
従いたし軍労有之旨書付

本多八蔵

一 権現様味方原御合戦之節高祖父本多
八蔵儀供奉敵一人討取候

一 天正十二年尾州長久手御合戦之節旗本ニ而
紫御下知ヲ以敵ヲ切崩候ニ付森武蔵守
手属居候ヲ八蔵組伏首討取候

一 同年尾州蟹江之城御攻之節右八蔵儀
供奉討死仕候

小笠原源七

一 天正十八年 権現様小田原御陣之節曽祖父
小笠原三郎右衛門儀供奉於酒匂宿せり合之節
一番鑓ヲ合敵ヲ突倒其上大勢斬
懸り候付鑓ヲ捨切戦又一人斬伏候而足痛

手ニ被為取候人数之首ニ御座候

一 慶長五年関東御陣之節下野国ニ供仕
御一戦之刻先鋒致一番首并元之刻小山ニ而
被入御覧首を捨て御旗ニ而作之付又
相戦敵一人討取之首小山ニ而被為入御覧河越
河内守殿御本陣ニ而遺（違）高手一番首
名之勝栓 御前被為召御称美之
上意有之候

畔田半右衛門

一 永禄元年高祖父畔田半右衛門松平勘四郎
手ニ随ひ尾州科野城ニ而籠城尾張勢
之一戦之刻討死仕候

一 同六年 権現様於上和田一向一揆之節被
合為之各被成合候刻曽祖父畔田半平
時定ハ同様ニ合相戦竟ニ敵悉被敗小ニ候

一 天正七年九月松平甚右衛門 牧野右馬允之

作州後州枯松城を攻る刻祖父時田半左衛門
正成敵一人討取候

茂野八郎左衛門

一 天正十年　権現様於甲州新府北条氏
直と御対陣之節小田原より又為加勢北条
左衛門佐大軍ニ而都留郡黒駒筋茂林末
発候方鳥居彦右衛門水野日向守松平
備後守三宅惣右衛門古府より出く古戦
場ニ而勝利敵数多討取候刻祖父茂野善十郎
久勝敵一人討取候各存取之旨
上覧之上茂野事別而ニ而　御出
御尋之処ニ右之首持参奉入　上覧候

小笠原十郎左衛門

一 権現様小田原御陣之節祖父小笠原十郎左衛門
被供奉於酒匂宿せり合之節敵一人討取候

一 関原御陣之節被供奉敵一人討取候

大塚組内

一 永禄三年 権現様参州東條城守将吉良義昭御攻之時曽祖父大塚甚左衛門致供手敵一人討取候

一 同七年於参州糟塚台西方の岳と世里合有之時敵二人射倒候 其内一人之名大光菱五郎

長坂小右衛門

一 権現様甲州方と御取合有之節 年月不分明

一 松平源三郎逆心之時高祖父長坂七郎左衛門天野三郎左衛門上意を奉り参州中山源三郎へ被付置候 此時七郎左衛門疵を被蒙死去

渡邊六郎左衛門

一 権現様長久手御合戦之刻祖父渡邊六郎左衛門生捕被仕手敵一人討取候

下村三太夫

一 天文二年 清康様参州伊田御合戦之節

五世祖下村道智被仕候節一人討取候

小泉武左衛門

一 権現様甲州新府御陣之時高祖父小泉源六被仕候一人討取候

荒川継左衛門

一 権現様味方原御合戦之時高祖父荒川甚右衛門被仕候討死被仕候

権田小太郎

一 曽祖父権田久助右同断

近藤久内

一 高祖父近藤久内右同断

小笠原彦一

一 高祖父小笠原三郎左衛門右同断

大橋平左衛門

一 曽祖父大橋刑部右同断

小笠原久左衛門

小笠原長左衛門

一 永禄十一年 権現様今川氏真ト御取
合之節 于時氏真遠州懸川ニ在城 小笠原與左衛門為御使
遠州高天神城主小笠原美濃守 弟 同
與八郎清廣 久右衛門高祖父 弟 同右京進茂秋
長左衛門高祖父 御味方ニて仕官之御旗下ニ付御請申上候
翌年正月 権現様掛川西宿より御攻寄
候節小笠原一族ハ東口天王山より攻寄於

鶴井口相働候手柄和議ニ成今川氏真城を
出し小田原江退候

一 天正二年武田勝頼高天神城を攻ル時城主
小笠原與八郎 忠の字 後号弾正 逆意を企武田方に
降参仕小笠原惣右衛門同右京進ハ御味
方之筋目我不違と八郎ニ脱ニ於城中及
一戦変和議ニ成於見附原東坂武田一族
乃若ヒ小笠原弥八郎 右京進子 後長左衛門 を人質換ヨ

仕手より惣右衛門迄并一味共各
浜松ニ参候

三井孫助

一 権現様小牧御陣之刻曾祖父三井孫左衛門
光忠被供申敵一人討取其首馬之先ニ而
仕御前ニ差上候

鈴木橘之丞

一 天正元年於遠州山科手越味方并甲州方
与一戦之時高祖父鈴木本平十郎大須賀五郎左衛門
手ニ随ひ討死仕候

長坂角弥

一 権現様小田原御陣之節祖父長坂甚平
本多中書手ニ随ひ武州岩付城攻之時
討死仕候

山下七郎左衛門

一 権現様味方原御合戦之節祖父山下長左衛

然兄山ニ而七年右馬ゟ討死仕刻長兵衛則縋
合セ右之敵を討取七年右馬為仕返し申候

西尾吉太夫

一 権現様遠州濱松ニ被成御座候刻甲州方此
者共遠州三河迄へ出申候節合戦ニ及候祖
父西尾長兵衛伏兵ニ出敵一人討取候由
上覧被成御称美被成候

一 右長兵衛駿州河内成島ニ而死去仕候

権現様甲州新府御陣中兵粮運送之儀
被仰付無滞相達　上方御称美被成候　其後
小田原領ゟ海賊河成候節ゟ出入刻追掃浜
進退男女一人も不損候様ニ仕候
上意有之候

牧野源兵衛

一 権現様ゟ五世祖牧野傳左衛門入道竹意
參州加茂住人
西ノ家旗下者　西郷弾正後見ニ而御付御重

惣弐拾貫於参州牧野村ニ而下置候御添状紛失
高祖父作次左衛門儀蔵正甲州勢参州ニ而御長
於須原一戦有之刻討死仕候
大済ニ在之
一 慶長五年 権現様奥州御出陣之節
福島左衛門大夫正則供奉仕居城尾張
清洲ニハ城代津田備中守祖父大済云萬右
衛門并悉石田治部少輔依謀反為調略

之使木村惣右衛門松浦安右衛門と云萬方ゟ差
越右衛門大夫事ハ秀頼ニ別心無之候間目上
方一味可備也家中之面々遂相談清洲城を
可借渡由演説す此候云萬為不許容
右之旨備中ニ申候処文案乃外陸為上方
同心云萬達而申止手切之銃為便ニ而
津田方より左之一面目之後又木村惣右衛門
加賀江添八年之差越右之様ニ申候而大

重而東ゟハ右補弾正を以て越后ゟ関せ進退ニ
于後云萬弓節仕清洋城并郭乃嫌々悉降
越ニ付兵粮六万石城中ニ籠置ニ而西刑和
祥被仰候今度于方一人之覚悟を以諸事
存分ニ相叶旨悦喜仕候 輝虎関東御
出陣中西刑方より右之兵粮差上ニ付御
感之 上意有之 于後関東御勝利二
并奇ニ御動座之時 云萬清洋ニ而之鉄

西刑具ニ披露ニ上変忠信載すし方々共より
于方領国之内所々之地ニて覚悟有
御旋有之付同年西刑安藝備後伯之
附達 上聞備州輔候と被仰候

賛 一本太史

一 永禄三年 輝虎尾州棒山城御攻之
刈敵門を開き上ハ七千人朱木变文親賛掃部
氏信先を進之陰を合せ候敵城ゟ川夜門

之内ニ而候 掃部陰ニ而手入家康之固先陣
も味方相続き一番ニ門ニ推開き付掃部ハ其
城内へ入候節城之後右之働御称美之
上意有之候

一 慶長五年 台徳院様信州真田 御攻
之時右掃部牧野右馬允ニ相随ひ敵可より
足軽ニ出之処其手ニ見知り 右馬允ニ此首栈
皆判着見ニ而掃部樹東浪右衛門 妻人旗を

推立進ミ候処趣意早小者り真田文字を
城ニ進入候
藪 矢兵衛

一 大坂御陣之細文藪三左衛門 西別（利） 細川越中守
被借五月七日於天王寺口南手一番首栈
取候ニ依而越中守石連 台徳院様御本陣ニ
而御目見仕候

九鬼半左衛門

一大坂冬御陣之節祖父渡邊数馬助直次
九鬼長門守借仕出福島表敵船乗取剣
冨乃船印并螺貝等分取候而其節鉄炮ニ
中黒剣等被為見候之致進上 長門守
方ゟ為 上使阿部四郎五郎殿を以数馬ニ
御菓御直目録被下置候ニ付右之趣上聞ニ達
数馬方ゟ申上候上意数馬御働御称美之而
御懇之 上意有之旨上意有之方ゟ承伏

不相替仕候 数馬儀右之剣ニ而無程死去其子長右衛門直隆
九鬼長門守名字を与へ自分九鬼を名乗候

安藤帯刀家来
中根治部右衛門

一台徳様冬之御陣ニ於平松平兎人と申ニ合有
之剣高祖父中根助右衛門并一族共七人雑
兵数多召連候而箱柳より出張味方仕於
菅生川一戦之節右兎人を討取候

水野右衛門佐家礼

杉山孫六

一 権現様小牧御陣之節曽祖父杉山四郎左衛門
水野右衛門佐組ニ而足軽ニ而候長久手出一戦
鉄炮せり合為之刻敵乃備之内ニ白き袖
なし羽織を着し先ニ立ニ下知する武者を
彼ハ大将なるとみへたりて杉山四郎左衛門右衛門
佐ニ申ニ鉄炮を放処果而彼武者ニ中る
則森武蔵守ニ而有之候

丑
三月廿四日

吉村直良
伊藤篤敬　校

譜牒餘録巻第四

水戸殿

松平讃岐守家臣

水戸殿

中山備前守信吉覚書

一 信吉父勘解由家範代々中山ニ居住仕候而
小田原北条家ニ奉公仕候 天正十八年小田原没
落之時分家範武州八王寺城ニ在而
戦死仕候 其時之始終
権現様御感ニ而 忠臣家範子共八人之内 召出候
兄助ハ照守ニ而 廿一歳 後勘解由と申候
末九助信吉 十四歳 後備前守と申候

父勘当之由家康様え尚勘解由申上ル處
相出シ上ケ申候哉不申上候
一 信吉事従是　直ニ以時分ヲ角左扇之
召出シ下候而小性ニ　被仰付置候　御側
近ク相勤候而小性之内又雅楽助と名乗
候而致シ不申候後使おかる之事申候
一 信吉従前頗有之附分ニ歩相取候
仰付候知行〆五千石拝領仕松平右衛門大夫

正綱秋元但馬守茶胡同列而御近習ニ
而召仕候
一 慶長八年於伏見　御城盗人有之
而紛入悪者刀を抜以侍中ニ刀ニ乞番衆
事成く有之以処信吉は追詰め来逐
召捕候而御成捕参へ之以右之覚宗ニ
依之有以後　御褒美思召為御褒
美黄金二枚拝領仕候其ハ御松坂之人

二而ハ主ハ庄ハ女捕し者有之ハ夜取志免
中ハ同ク我ハ篠原女捕し者ハ内致
拝領致し由云上使ハ延能元候前ある引志
免ハ以後懇合ハ男一人ニ未極ハ由上意ニ而
浪人中ニ候 御甚免之ニ 思召ハ

一 神君ハ初ハ上下ハ御先祖之地ニ付ハ中山も
下之以下之由 上意之ハ安思領ハ勘解由丞
ハし男私儀も何方ニ而も拝領仕度之由申

上ハ後於御籏本ニ 上意ニ而中山
之近やう被召出之中ニ而拝領仕ハ

一 慶長十一年駿河ニ而 御城国繰之
刻進ミ候て松平大隅守ハ書仕り以後
所ニ而候て候ある番仕ハ進ミハ内も
明不申ハ夜込合ハ而女中なしと申ハ
検視様も御去関前ニ而御起候て村越
茂助殿其外ハ而進ミても成ハある宰相殿ニ

出御ニて能々由を申上候處ニ而主水正ニ被下
御覧ら拝候得ハ御門を被出大桃燭之
無出し組之御歩行衆并ニ足軽之者
左右ニ立交込合申様ニ仕候所 御感ニ
而 忠節候
一 尾張殿紀伊殿ニ成瀬隼人正正成安藤
帯刀直次、右両御附被成候水戸殿ニ備前守信吉
右両附ニ其以後ハ成瀬隼人正帯刀ニ

御作法ニ而 例月ハ端午重陽朔望ニ
時服召上候得ハ御目出度儀仕候今ニ毎
着ニ致通所持仕候
一 於 御家老御附仕候ハ知行五千石并水戸殿ニ
右両附候者共十七人之知行三千五百石
在之 御朱印無之迄ニ今ニ備前守所持
仕候
一 慶長十九年大坂御陣之時分ニ上総殿

此安る〻兎有之候ニ付信吉を御前へ被為
召出被遊度思召候處其品兎有之候筆一本方を
御目当ニ被指上候而ゟ取候ハ父勤ヶ申候書
中ニ而被成ちんを　御見立ニ而被遊候ハ〻御受
筆石乃ことく　ニ而　思召ニ候ハ〻書残し
求め候へとの　上意ニ而此節者相勤申候
権現様より信吉拝領物
御刀　備前兼光

一　御刀　下坂
二胴ニ而大めしゝ被遊候と申て銘ニ申候
上意ニ而乃裁仕候
一　南蛮胴
一　御鉄砲
一　御伽羅
一　獅子ニ而根付　弐ツ
一　石之取くし今信吉か拝領仕候
一　信吉娘ニ而記信吉依に後市正之中

隠居仕候而則彰申候 慶長十二年
古徳院様ニ而 五者之者依ニ而並御小性
組ニ而 信身大坂夏御陣之供奉仕候其之
御陣五月七日岩山表ニ而敵大勢引退候処
信正唯壱人追留申候其以刻味方之足軽
廿人計雑之者共不存敵之伏兵在候処
信正下知仕候之者共立あかり七挺鉄炮を
打掛させ申候処近成候而中山図記と申者
ニ而作返し候所ニと申候故大勢ニ候足ニもや
引退其上上様切有之候之故ニ是非なき
儀すけ申候無限遂 高聞ニ褒美之
上意ニ而被仰候之処信正人先ニ申候段青精ニ
候 思召候達ニ而相手段を候御尊をも拝領
信正申上候も無之てさきも申候 孫馬ニ
申候て召之孫右ニ尊之申上候
千仙度之候上洛之御供申上候寛永

元年従
台徳院様土井大炊頭利勝を以
水戸殿江家老ニ被相附候　上使

信吉次男
中山隠岐守信久

信久世悴
中山平左衛門信治

貞享元年三月晦日
中山備前守信成

天野孫七郎事跡

一　天野孫七郎事先祖ハ代々参州岩戸村ニ
住居仕候
御当家御先祖親氏君関東ニ而浪人被成参州
松平江御移被成候節中山七名御手ニ入中山岩戸
村之事七名之内ニ而候故孫七郎先祖
御家人ニ罷成
御代々ニ而奉公相勤申候事

一孫七郎事力量人ニすくれ申し武功有之
者也國之尾張ニ而ハ住候其比参河廣忠之
城主依之爲九郎左衛門と申者
廣忠様江致敵對之上押領仕猛威を
振申候ニ付依而悪敵子細遠御退治雖
成之　思召闘(?)討てられ候御内存ニ而
討手之儀被仰付候孫七郎ニ被仰付
御吟味ニ而被仰付候　行合當座ニ斬殺申候

百貫文劔(?)を為褒美被下置[illegible]貫文之領知
を被下置候御感悦ニ而ハ孫七郎浪人
之時ニ被成候旨被仰付天文十八年
十月夜中依之御麻呂(?)ニ思入月之光を
頼申候而依之頭ニ近を斬申候依之
近隣(?)之もの大刀音ニ驚起合猶不動
仕候依之少も動不申候故仕済候と存
速ニ罷出候ニ付其後城ニ而罷出申候而

刀鞘ヲ払申候故立候而刀抜合
致候帰申候時分ニより切ニ付孫七郎
事也佐久間ニ手ヲ負せ候と其名を称し申候
得共佐久間事当座ニ死不申候段
其後ニ手負劔ニ而ニ相果申候右之
佐久間を斬申候事ヲ大久保忠教
かゝ書之編候三河物語ニ孫七郎刀を抜候而
佐久間ヲ出合申候是ハ誤ニ而御座候孫七郎

ヲ佐久間を斬申候ハヽ立候刀を抜候而
致候事也手自頂戴仕候よし申伝候
事

一 天文十八年三月
広忠様御薨逝之年十月孫七郎佐久間
ヲ斬申候
権現様御年八歳竹千代様と申候御幼君故
御家老阿部大蔵元吉石川右近将監忠成

右人々感状并出帯所帯之領知等ニ無之
事

本紙折紙

今度依久間切ニ申之訴訟以然者
兼務之事以習度并集人名田之
内地ニ而給而指出之文出置以末代
不可有違乱仍如件

天文十八とり

十月廿七日

阿部大蔵 判

石川右近将監 判
忠成

大野孫七郎殿

一 権現様御幼少ニ而駿府ニ在城之事
今川治部大輔義元万端ニ被支配候大野孫七郎
働之拍子ゟ多居弘治三年十二月義元ゟ感状
給候由

本紙照写

於去年吉橋表任忠節以有佐久間
九郎左衛門切之依而竹千代大浜之
内為年来之名田之内以子足扶助之抽
粉骨之上者永不可有相違者也仍
如件

天文十九
十二月十二日　治部大輔　判

天野孫七郎殿

右安道之感状共備之今所持仕候

一佐久間加之衛門申候孫七郎嫡子是ハ孫七郎と
申候元亀元年江州姉川陣之刻参州
本郷申候御人数同月
権現様御旗本ニ陣仕候処於江州姉川之事

一 於桜井参州ニ而及難儀候ニ付孫七郎
防戦後ニ戦死仕候故参州ニ而三島ニ居申候
父孫七郎入道事手負中風ニ煩申候故
御供不仕候御陣ニ附杖ニすかり御門迄
罷出候処
権現様孫七郎入道ニ被仰候ハ今度
手前世悴孫七郎戦死仕候故侍共を打捨
三河ニ居申候ニ付相成働仕候由別而

不便ニ思召候との御言葉被仰聞候由申伝候
事

一 姉川御陣ニ附而戦死仕候孫七郎嫡子久右衛門
事岡崎ニ而生候ニ御座候由申候其後薩摩守ニ被召出候
ニ而被召出尾張大納言様へ有之候ニ御座候由申候
久右衛門嫡子助右衛門若年ニ付
権現様ニ被召出御小性相勤申候上洛ニ付御供
仕於城州伏見相撲見物ニ罷越候処

同道仕候処不慮之喧嘩仕申候喧嘩之
首尾を好仕候故右場所悪敷候故助
衛半平と一所ニ右場を立退申候
其後年月衛通申候而水戸中納言殿ニ
被召出候事

以上

元祖弥七郎ゟ五代目助之衛正吉世倅
天野助之衛正勝上

鈴木右近重好事跡

一 重好祖父半左衛門重勝父三郎左衛門重時
代々三州八名郡ニ而家吉田ニ住居今川家ニ出
仕父子共数度軍功有之候依之今川上総介
氏真ゟ感状頂候事
去酉年四月十二日長篠迷之砌自彼地
人数召列吉田ニ相移之処同年五月廿日
父半左衛門と重時并近藤石見守

右三人者三段之前令大貮其已後籠
者前於遠州之御逆心之刻忠(判)并牛久保
長篠亀城刻者篠ゟ数度兵粮入置之
牛久保ゟ数多人数遂遣之三ヶ年公之
取神妙之至也并去上者三州一城者踏
人数抱置継之段名是亦彼地ニ令堪
忠因前之忠迎申者也、其忠賞之
也、就者於三州出置吉河能者遠

只今(令)訴訟之旁為其段相当遠州川間領
之内新橋・小沢渡・人見之合三ヶ所不及
検地之沙汰永為知行不相違不一透
者遠州寺社領並其上河小并林可
令支配諸役等自前之儀無之上
令免除之重而忠賞之上可加扶助重
無相違可抽忠功之状如件
永禄拾丁卯年八月　日

上総介判

鈴木三郎大夫殿

近藤石見守殿

右之感状家傳ニ今所持仕候

一 永禄十一年近藤石見守康用菅沼次郎右衛門

三郎大夫三人申合候而

権現様江御奉公申上遠州筋之御案内仕

就夫

権現様より右三人ニ遠州井伊谷を被下置候ニ付

権現様ゟ御奉公申上遠州筋之御案内仕候就

一 通

権現様御誓文ニ而御誓詞被下候并菅沼次郎右衛門

定盈

今泉四郎ニ情近信誓詞ヲ以副状来

此度就遠州入之節右三人以忠節井伊

谷筋令案内一段ニ付而感悦之至之

一 右上坂右京亮方本知行之事

一 井伊谷跡職新地本地一円出置事

一 二俣左馬助跡職一円之事 但先年五百貫文分

一 高園為子方事 一 高梨 一 年かへ之分

一 あんまさの分 一 まへこく橋流め方

一 山田 一 川合 一 かやま

一 国領 一 野邊 一 かんさう

一 あん濱之分 一 人見之分 并新橋小沢渡

右彼書立之分何も為不入令扶遣永為私

領本並所や并於此地田中に三百貫文令本

並ちや井伊谷領之外此書立之内以

武千貫文但重之地一本並也并從甲州

方押之諸事以先規文中定

上も進退かるりて申理之扶遣一本並

之上被何方へ成共何様忠節以先判形出

並共於此上も扶遣有間敷者也無之

菅沼新八郎方ニ申含也仍如件

十二月十二日　家康御判

菅沼二郎右衛門殿

近藤石見守殿

鈴木三郎大夫殿

右之御證文家ニ傳り今所持仕候

敬白　起請文之事

今度其三人以忠節井伊谷筋令案内遠州へ

可打出之旨本望也然上出置知行

分之事永々末遠而不入検断手若

従甲州彼知行分ニ何角申候共聊以不

進退引懸以可見放ヲ可申候也其外

之儀不及申候右之旨若於偽者

梵天帝釈四大天王別而富士白山愛宕

日本国中神祇之可蒙御罰者也仍如件

永禄十一年十二月十二日　家康

菅沼新八郎殿

近藤石見守殿

鈴木三郎太夫殿

右之御起請文本紙者菅沼新八郎方ニ
以在之候、然ニ新八郎幼少ニ付而右之御請
以前新八郎と親類ニ付、彼御起請文預り
並以前火事之時、荒火入焼失仕候由

承及申候
今度井伊調儀之通候節本望極候
能々吉田へ々御礼申上御納之百姓共
相違無之候、彼者為相当米之父之
十貫之分相済進並ニ付也、上之向後別而
等守前之新為手実一年合候、今度
思請仕り方ニ候由被有間敷候
拙者誤人並ちいよ上ハ手ニよこんの間敷候

若此旨偽於申者
梵天帝釈四大天王別而富士白山阿多古之湯地
并阿弥陀仏之罸を今生後生ニかう
むるへき者也仍如件

永禄十一年極月十三日　菅沼新八郎
定盈

今泉四郎兵衛
延傳

近藤石見守殿

鈴木三郎太夫殿

右之起請文家傳ニ今所持仕候

一　同十二年三月大神君様御出馬遠州堀
江之城楯籠候大沢左衛門
権現様より井伊谷三人之衆　御身ニ被及早速
人数差出し候処ニ於時三郎太夫於城之虎口
戦死仕候三郎太夫子鈴木権蔵も右之場ニ而
をも残限を仕参候処ニ被申候ニ付近藤石

是ゟ東ハ用田場ニて残を合申候故右之様子
能見へ申候事

一　三河太郎戦死仕候時分重好幼少之故三河
之又衆不都合権現様為重好陣代相勤申候
元亀元年江州姉川之合戦権現様御供
相廻仕候元亀三年十月甲州山家之
三方衆作手之奥平美作守貞能段嶺
之菅沼刑部少輔長篠之菅沼新九郎

権現様ゟ別心仕甲州之山縣三郎兵衛昌景
を井伊谷筋ゟ引出重好居所山家吉
田へ多勢を以押寄申候吉田之城右城
手勝屋を相立二之丸之柵外之儀ハ両
ハ菅沼常陸介重好と申談之之守
達ニて見分仕扱申候得は彼地甲州へ相渡候
坂ゟ中所ゟ道二里程引退申候其時
伊平小屋之菅沼次郎太夫ハ菅沼石見守

忝候由重好并鈴木権兵衛小屋ニ而未扨
申候處右之甲州勢伊平小屋ニ押懸候
大手ハ山縣裏口ハ山家三方衆案内者ニ
而四方より取寄申候刻井伊兵部少輔遣候
石見守秀用鈴木権兵衛大手之虎口残
置申重好権兵衛矢なとゝ六ッ度申候内
井伊兵部少輔戦死追付権兵衛も槍を取
戦死仕候事

一 元亀三年十二月遠州味方原之御陣重好
始而御供仕候
一 天正三年五月三州長篠御陣之時分重
好者菜山へ上り戦場之形勢を見届
帰
権現様江其言上仕候所私ニ而若輩申候
処場不宜候故何之働も不仕候只今
戦場所を悔て見届候ニ付申上候処 忝出

申し
権現様阿部善右衛門正勝を召被成候ハ
弥太郎若年戦場未熟ニ候間同士討ニ
逢申候半と御意ニ候て方違留申候ニ付と
云　仰付候善右衛門歩行武者頭被成之
申付長柄之鑓ニ而横へ乃筋を遮申候ニ付
重好家彼是談陣へ廻入首討取申候
申候此時重好年十八歳

権現様御旗本ニ被召抱候事
一　同十二年尾州長久手御陣之時分高嶋海
村越茂助並吉与三郎ニ而候　信かゝ井伊
若三人之者と井伊兵部少輔直政ニ被仰付
て預ケ置候　仰付以後則之衆之兵部
少輔様ニ而奉公仕候時重好首三ツ討取申候
一　同十八年小田原御陣之砌　井伊兵部少輔ニ
随従仕武州岩槻之城を攻手痛キ戦

手疵被所蒙申候此其後江重好召返し
松平浅野弾正少弼長政亭ニ而中務
大輔忠勝同人流る太政多居左太夫
元太戸田三郎右衛門尉渡平岩七之助親吉
何も兄弟ニ候事

一 慶長五年関ヶ原御陣之時分重好事
井伊兵部少輔先手相近仕候而より一番ニ
高名仕候申候其時兵部少輔ゟ首数
百五十討取申候間重好ニ被下候其後五十三討
取申候事

一 同御陣之時分土佐国主長曽我部
土佐守盛親石田治部少輔三成と同意之
仕関ヶ原ニ出張申候土佐守事父元親
権現様御懇意ニ候 仰合候處ニ今度逆徒ニ
與同仕候段不届ニ候 思召土佐国被召
召放山内對馬守一豊ニ被下候就夫土佐守

居城浦戸之城請取仕並不仕ニ上ニ而対ゟる
相渡可申旨井伊兵部少輔殿 仰付候故
兵部少輔家人重好ニ与申付十月十七日大坂
より船八艘ニ而京出同十九日土佐ゟる居城
浦戸江着て仕候處以前一揆蜂起仕
鉄炮を放斗ニ而打至申ニ付重好船ニ
手負数多出来ニ依之鉄炮大けり
退重好船之舵艫ニ火を出立以而 上京

之趣可申由申ける船を二艘乞寄以相ニと
まちまちせ申三百艘計之船共ニ番
為附分合翌日巳刻追悉 浦戸之庵
なを申候て陣立以老共中を先雪蹊寺
備まて船を為着申とて東内十人
指添申以付判雪蹊寺ゟ上り兵立以
処一揆共数合二万七千人鉄炮丸を掛ケ
矢弓迄を相拵寺中ニ之取巻番を仕候

其上一揆之大将竹内惣右衛門なと初め
御訴訟之旨申出候子細ハ右佐渡國右衛門ニ
てき下並ニ御召上ケ候て御仕置被仰付
間敷候ニ付上右衛門居城并海中ニ召寄候而
中ニ有重好申候其段を伺　御意ニ而申上
三十石存分ニ而座中付置候処不届候ニ
申中切之重而左衛門を一兆　或十ケ村斗指
ケ村ニ而も右衛門ニ申下並ニ候様ニ御披露頼

入候処度々御申候ニ付入候而十月十日御役寺ニ
私共拝之運計策右衛門家老共名
陸ニ而奉清之一春なと初年貢米所之相済候
毛基左衛門福富甚之助町野大右衛門
中間笠庫五石助之助吉田宗性吉田
平右衛門吉田孫三郎寄足左衛門次国吉小
三郎吉村九之助萩沼彦右衛門大里左
衛門太二郎林左右衛門津田源之助以上

十七人主好ミより引分一国ニ為致ま之判同
極月遂一戦一揆大将吉川弓部池田又
兵衛野村孫太夫福羅物兵衛栄畠
喜多衛津井作兵衛下元十兵衛迄
備中多衛此初め首数弐百七十三討取
船弐艘ニ京其大坂ニ上せ申以て多納か補
披露其仕以て上ニ而 御感之上ニ清常越
以其後仕居城之儀其不及申其代

一国仕置仕出国対ニ而候ニ相渡下旨御下
知之状来以有ニ而岸主ニ沙汰仕対馬守ニ
引渡申候者之尾
検視御感ニ而 其旨之依在中安作渡候由
候分其代国迄異有得以 他出異有之得失仕以 右其代候
以仕置之事ニ有之兵衛か補候之書状ニ
誠以事
長曽我部元親ヨリ以国候大坂ニ以引

越之事ニ付而ハ其国人民ヲ傳テ以下ニ至迄
可相立ハ其外船并何事ニおゐても
為違乱召放ハ為其事仍人致来
年久御指図ハ諸事被指出候等不
可有異儀者也
霜月十五日　井伊兵部少輔　黒印
土佐国
庄屋

百姓中
其地ニ相渡召置之田畑居之
荒地何ニと致ハ田畑ハ能人請取ハ
致ス者ニ対其年貢并荒地免籍ニ有之者
も御用相勤被指出候所ニ年貢を取ハ収之
儀并相違之仕合ハ付上ニ其表之
相分別当城御渡ハ其外ニ而不相
渡候其先之ても相渡ハ若其者也合之事

淡路地におゐて　内府様へも披露
寄人数急速指下悉相果申候方
候も其地ニ可為番手候下しよせん
よいさし働候も油断まて急度申付一帯
付候間下して致之先様之旨可申候
左候ハヽあきれ外御家中下しよせ
堂免をも存之いまた其元ニて候方も遠く候
其元非分御才覚仕候事ニ付申候様て

十二月初日　直下

鈴木平兵衛殿

松井武大夫殿

一　急度申候去七日之書状一昨三日晩七半
国中御仕置之事相手披見申候
左候ハヽ御機嫌悪しく事哉候今度
其元之仕合並之首尾蔵ニおゐて
御安座之処ゟ御上ニ　内府様御前

被為成可申旨兼而候其上唯今御沙汰候へ共
手元之仕合ニ依而御混候様ニ付申上候而も
被合点有之間敷候何共笑止千万ニ候手地
御沙汰次第右之段被為上之元前分之首尾
ニ而御遠御沙汰一申候
一 右作及 内府様へ被為仰付候て手地仕
合及達可申候
一 予州阿州讃岐之元致陣觸候段仕か

右之世方之事ハ急ニ被成下由申候
為仕目而為手かけ手元之様子ニ御沙汰候
も自然方之右次第其日へ可被相働之
由申候唯今之働之事ニ而もすと申之候事
地も難説申候為手之段あるへく候事
切ニ御定候上可相働との事ニ候働之極候
も自然左右なて下し候手ニ方之様も何
相之成候時ニてら御果候

一　山對馬守殿へ一領具足等上洛之儀
于今相延候而、申越候由候、定而此上も可申分
可有之候

一　對州より一領具足へ申分之儀御座候ニ付而
方々より申上候、其國仕置申渡候儀も國前
事候間、家老衆始一領具足も不残
ものとも迄、萬端致候様ニと存、其方指
越候處も、夜とし仕合さりとては不遠

志つさる儀なく候へく候

十二月廿日　重政　御判

鈴木平兵衛殿

浦戸之城并畑中村之城共ニ城米ニ付
諸役人書立不来候ニ付、帳面之写遣候
出候間、右城ニ付而被遣候、仕置可申付候
御分ニ者上方へ上り候道具も時方之下而上り
對馬守殿ニ治定候道具、大坂在番ニ

遣を候兵粮何も相渡判左之さへ候而請人九右衛
参有之候伏見秀頼様御荒命御兵粮之
分も能く相改対馬殿土佐殿安人之旨
部ケノ印形無之候てハ難い土佐殿御勘定
下ら成申候 対馬殿御勘定下ら衆無之
不ら知候写重而自是一年人之由相理
下ら部候右之浦戸畑中村安城在之
諸道具之悲帳致候相対当殿へ上ら送を候

道具土佐殿へ差送を候兵粮寸方へ取遣へ
及具書付対馬殿就へ見せてら申候左様ニ
学之候りし自然道具なとも色々不
無之何も 内府様へ上り候との事存候写
其分にて下ら申付候次土佐殿も小々家方
寸方へ下ら始為上候何も寸方へ上せ候事ふ
敷候りし様之並候毎土佐殿対当殿安人之
就へ家部ケ取而自是人無之可遣を申

理を致候處致て懸越候処此方之者
座候て者附直ニ候様ニ可申候
極月廿日　直政　御判
鈴木平兵衛殿
右之書状之内一領具足と申候ハ土
佐國長宗我部元親之時分より其
居中筋目有之者共ニ国地を少充作
致させ其具足を一領ツゝ渡し直軍陣

之時分一騎役仕候土佐國中ニ大勢
有之是を一領具足と申候此時分一揆
起し申候人数ハ多分此者共之由ニ候
右之書状ハ右太夫家ニ伝り今所持仕候重好
事此時分ハ平兵衛と申候後ニ石見
と改申候事
元和元年大坂表之御陣ニ本多佐渡
守正信諸軍之後備ニ而候重好佐渡守

相働ニ而在首貳ツ討取申候其時分佐渡
守殿執成有之候
右御所様江　御目見申上候其後上総殿
江附属被仰付候其後上総改易飛騨守能登守
之後重好浪人仕候處水戸中納言様
江附属被成候事重好嫡子重高重辰と
申候関ヶ原御陣之刻父重好と一所ニ相
勤申候大坂冬之御陣井伊掃部頭ニ出
孝ニ随一備之頭仕相勤申候同夏之御陣
井伊直孝手補并縁ニ随従仕上州安中
横川之関在之處申候重辰嫡子造酒允
重宗
大猷院様江出　百五拾石小性組ニ出　仰付
之而已在從早世仕候重辰次男重政祖父
重好養子ニ而成家在継従五位下石
見守ニ叙任水戸中納言殿同宰相殿ニ

奉公仕候事

以上

鈴木石見守重政世倅

鈴木長之助重務上

野中三五郎重政事跡

一 三五郎父堀江式部右衛門と申候、代々越前ニ
住居仕、堀江本庄安城主ニ而朝倉中務旗
下ニ有之候、式部右衛門事も朝倉左馬
頭義景妹婿ニ而罷在候、能登加賀ニ一揆蜂
起仕候ニ付、式部大輔事、義景ニ被頼為
一揆退治加賀ニ罷越候、其跡ニ而義景人
数を遣し堀江本庄安城を立三宗ハ中候

在京之時分ハ式部大輔浪人ニ而居申候
式部大輔世悴若人ニてしは見苦を仰康ニ
織田信長公ニ而 右加様ニ三郎左
権現様ニ御出来公方上ニ而元服候 右之様
三郎より康ニ而嫡子ニ而依堀江左衛門号候
事被仰急ぎ御中左衛門号候事

一 元亀三年十二月廿二日
権現様与武田信玄於遠州味方原ニ而一
戦之刻三郎信康味方及敗軍ニ
時分
権現様唯ニ而騎欲陣ニ而御旗本左ニ而進処
三郎殿先手追付御馬之口ニ付なぐり候へ
引立申候 勝頼信玄同長其と申老七八
騎ニ而先懸仕候処系ニ而左を
権現様御見知ニ而以長かくと仕志より
之様子へいかひるニ申事三郎殿向

長左馬上より突落し則首討取申候
其外白岩志一人討取申候又武志一騎池
東三郎と暫戦申候内三郎十文
字にて残る敵ニ馬を突申候へ共懸
出し彼武志被突落言ひ逢申候追付
三郎も引取申候右長半二三ケ年
以前之
権現様ニ御小性仕居候処尤遠　御意

甲州ゟ罷越候而其以仕候得共罷在申候
権現様浜松ゟ御岡崎城へ被成御越候ゟ御
廣間ニ被成　御座三郎左衛門　其以後御盃
并正月之御祝御節振舞ニ被仰付信国之
御脇指拝領仕候三郎左衛門ニ被下候御盃ニ
三日月之蒔絵御座候御盃を為
吉例向後三日月を家之紋ニ仕候様ニ
ニと雅楽　上意ニ而御座候故則三日月

右今ニ至迄家ニ致シ候右信国之御脇
指家ニ傳リ今所持仕候事

一天正七年三郎様 御台築山殿を
生害仕候其後六十日程 御台様ゟ
為致候ニ付岡本平左衛門仕置堀江へ罷
在候其後
權現様御上洛 還御之時分中坂越
御座之節於遠州濱名之御殿村越
茂助罷出取次申上御目見仕其時分駿府ニ
被召下候由被仰付候其二三年程病死仕候悴三右
衛門重次幼少ニ而御座候故駿府ニ参上仕候得
共浪人ニ而罷成候事

以上

野中三五郎重政孫
野中三五郎友重 上

松平讃岐守家臣

一 權現様御朱印文言之写

竪紙

常陸国那賀郡之内

石神村之内弐百石

米崎村之内百石合

参百石 右宛行

訖全可領知者也

慶長拾一年二月廿四日御朱印

大森半右衛門跡之
半右衛門孫拙者
大森勘解由

大森勘解由由緒之覚

一 権現様駿府ニ被為成御座候時分
御切米下祖父半右衛門被頂戴御奉公仕
其上於駿府病死仕候、親八左衛門儀
駿府ゟ水戸中納言殿江御附被為指上候、
水戸殿ゟ讃岐守方江御附ニ八左衛門事
於讃州病死仕候以上

八左衛門子
大森勘解由

墨紙
常陸国茨城之内
栗崎村之内弐百石
宛行全可領知

候也

慶長拾一年二月廿四日　御朱印下し

江川左七とのへ

左七子相主
江川惣左衛門

江川惣左衛門性(?)被下覚

一 権現様駿府ニ被為成御座候時分亡父
左七ニ刀頂戴仕候左七儀
万千代様ニ御附被為遊水戸ニ被遊
其以後水戸中納言様ニ被遊病死仕候
其以後惣左衛門儀水戸様より讃岐守
方ニ附候以上

左七子
江川惣左衛門

覚

一高百石ノ指石　河原田村之内

以上

右為知行被下候迄ニ令領

地者也仍如件

元和三年

巳十一月四日　御黒印

　　　　　　　　　　鈴木二左衛門とのへ

仁左衛門孫指主
戸田秀十郎

　　　　戸田秀十郎由緒之覚

一権現様駿府ニ為成御座候時分祖父

仁左衛門儀ハ　百石御判指以戴仕安多

上聟奴原組ニ而当年ニ而候上聟奴原ニ立身

然處右木ニ被成候由申候付上野介被仰付

躰隠候處大公而仁左衛門ニ離申候身寄候（仁左衛門浪人仕致病死候ニ付親十郎左衛門致知行）

も不限候ニ付十郎左衛門儀其已後御扶持

被召百石小笠原安房守殿組ニ被差置候處分

讃岐守方へ被遣候節右名跡ニ而御座候

得共元来戸田ト號來一家筋之由承

申候由右を以亡父十郎左衛門戸田之姓申候

十郎左衛門儀於讃州病死仕候以上

十郎左衛門子

戸田喜十郎

一 大猷院様御朱印御文言之字

横紙

武蔵國橘樹郡内

篭村百八拾弐石九斗

并橘樹郡沢尾村

拾八石餘合貳百石之
事令扶助之訖全
可知行者也
寛永二
十月廿三日　御朱印
久米新四郎とのへ
新四郎方ヘ養子相立
久米新四郎

一　久米新四郎由緒之覚
久米新四郎儀私養父ニ而御座候実父ハ久米
与三衛門と申阿波豊後守殿ニ奉公仕候実父
新四郎と従弟ニ而御座候私兄二人之新四郎
養子ニ仕候処早世仕候故私儀養子ニ罷成候
ニ而養父新四郎方久米弐三衛門と申者
紀州殿ニ奉公仕候右之弐三衛門子分ニ仕新四郎
方へ養子ニ仕候養父新四郎病死仕候

候而私儀毎年取替仕候手際
御目見ニ而茂何月迄ニ而跡目ニ被仰付候ニ付分
二重ニ養子ニ仕候得者成跡目立不
申候以上

新四郎子
久米新四郎

一 蒲生飛騨守殿御死去後

権現様蒲生源左衛門江被仰付候
御書之文言ニ写
飛騨殿儀若気之仕方
其方儀随分飛騨守子世伜殿儀ニ候
御取立候者於我等満足ニ候
然者何様ニ茂候者
元有様合可相談候而
精ニ事肝要ニ候也

三月三日御判

蒲生源左衛門殿

一 飛騨守殿死去以後跡目之儀、御朱印
出候処、中務少輔年寄之ニ御朱印被下候
権現様ニ蒲生源左衛門以前仕候由、書状文言之写

飛州就死去、右人大坂ニ
而右指子として御尋
之儀重而御相談
仰者識外実儀承
分以別跡目之
御朱印下并家中之書ニ
別紙ニ御朱印下之候條
指下候間安堵之儀候之

題目ハ別而以誓紙を以申候
御朱印ニ拝見ニ罷成候ハ
諸職ニ任御諚旨并自
以下悉令継目可有沙汰之
候也

二月十日　利家判

御判

蒲生源左衛門殿

源左衛門から六代末孫
蒲生伝左衛門

蒲生伝左衛門由緒之覚

一　蒲生源左衛門儀
蒲生飛騨守殿ニ仕候以後松平中務殿
会津より隠州ニ而不勤之者ニ而屋従中務殿

籠居ニ而令致死去候ニ付以　上意酒井
讃岐守殿より子源左衛門へ被下置源左衛門子
同名与市と申者酒井讃岐守殿方ニ罷有候
浪人ニ而罷在候同名与市と申者祖父
源左衛門ニ子ニ而酒井讃岐守殿ニ罷在候
源左衛門ニ与市義別立退候後早速与市与市儀
名を改加左衛門と申候右讃岐守殿為御仕候以上

加左衛門子
蒲生源左衛門

一　蒲生飛騨守殿被遣候御条目　御条目出候ニ付
権現様蒲生氏郷へ御当時町野左近将監并
主馬助ニ被下候御書之文言之写

遺状披見候則飛脚
死去付而者不及是非候
然余儀も別ニ候
以御条目書状差置可被

仰出候於我々満足候
各大慶不一通之趣
右使ニ而申述候

三月十八日　御判

蒲生源左衛門殿
町野左近助殿
玉井主馬助殿

主馬助孫於今
稲田十郎左衛門

稲田十郎左衛門由緒之覚

一　玉井主馬助儀蒲生飛騨守殿家来ニ而
罷在候主馬助子稲田大蔵と申候者讒及
病死仕候主馬助女名稲田ニ而候亡父
大蔵稲田号申候以上

大炊子
稲田十府右衛門

度々注進之披見候
明知之旗頭取至
殊其表雑敵数多討
捕之儀無比類事共候
猶無油断様肝要尚

委細者追々可有注進候
恐々謹言

三月廿三日　御判

遠山佐渡守殿
遠山与助殿
遠山半左衛門尉殿

下ケ札
此節ニも
佐渡守殿ニ而
ワ茂ハ

下ケ札
東叡山中堂の内
三[illegible]

一 権現様御筆跡文之写

荒々拘持之東叡山之
有如畫繪上者而後
守護者於擁護行者
新知行宛行者也
御判

下ケ札
東叡山中堂
[illegible]

天正十二年
三月廿四日 御判
遠山半左衛門尉

一 遠山半左衛門尉對死之古證
権現様遠山依預ヶ置載候以
大坂於下之表首級之
公方之案内遠山半左衛門
御書之写

下札 二男前条と申候

討死之儀無是非候ニ付
子供迄押計ニ不及由候
次男左京之事ハ前条ニ候
者之ヘハ尚井伊掃部頭
可申達候謹言

十月十八日 御判

蒲生侍従殿

一 御奉書御文言之写

下ケ札 美濃岩村

以状披見候望之通候
仍岩村へ相籠之者共
不残討捕之由注進到来
披露申候處神妙之段
以之御感之一段ニ候思
之旨堅可被仰出候
候条以使札申達度候

此旨可然様御披露候
拙者方より可申入候由
御意之旨承候此方之儀
猶以御存知被成候之通
ても如何様ニも相應可申
得其意存候
四月八日　直政判

井兵部少　直政
金山出雲守殿
御報

右之書状ニ有之
此外ニハ申遣候へく
御出之様もらいんか
之表之拙者名度

ゆふしろきと飛ふ首
此浪逆劔抜西海[illegible]
此れ[illegible]時[illegible]来
赤[illegible]重[illegible]此[illegible]
残りより[illegible]
千万く　廣頼一振
[illegible]
此[illegible]しく[illegible]き方[illegible]
[illegible]
与伊[illegible]頼一振神劔成[illegible]也

[illegible]
[illegible]
之[illegible]此かんしら成[illegible]
[illegible]中しふ[illegible]
[illegible]宮[illegible]ふ[illegible]
[illegible]此[illegible]子[illegible]しとて[illegible]
[illegible]成[illegible]
[illegible]太[illegible]
方[illegible]てしへらし雲

右之條々

十月十七日　　重政判

井上河内守

遠山伊代殿書面　重政

〻返翰

伊代殿書面之様指上

遠山伊予守様

遠山伊予守様由緒之覚

一　遠山伊代殿子ハ半兵衛尉と申候而東美濃之内
領知仕候半兵衛討死以後遠山伊代殿兄
弟病死以後遠山男兵衛之様子半兵衛
弟幼少ニ付而跡目立不申以後半兵衛様由緒
有之生駒雅楽頭殿へ手紙ニ生駒殿遣候
殿同其後御殿代迄遠山殿仕被病
死以後兵衛之様儀ハ本ニも被仰中納言殿へ

兵部中納言殿配下ニ出越之後丹州松平

丹後守殿ハ兵部殿被地被源八郎松平

隠岐守殿ニ兵部殿致病死ニ其子孫被相

續ト今ニ豫州ニ兵部在之以上

平名肩子
遠山伊豆守

下ケ札
此時関ケ原

天許万事ハ家康ニ候

被思召河ヨ羽左衛門大夫ニ有之状

羽柴左衛門
大夫殿之事
札

下ケ札
秀頼公之旗

宮部ニも在落城為自害返之候

属ハすや不審ハ中納言之七

下ケ札
実ケ原

十日附ニ至地之て來陣ハ

陣場刀人斗七ら金山為之

先御のら立ハ也

九月六日　御判

小笠原兵部殿
同　出雲殿

其方数度之軍忠并
比類之為三州一宮披判
宝飯二ヶ所知行三千
七百石宛行者也

慶長五年
十二月六日　御判
小笠原又六殿

長尾喜庵
此之後六代持主
書

長尾喜庵書中写之覚

一　小笠原豊後実子又八郎長寛ハ子又八郎

長儀男子無之女子二人有之栗山勘

斬と申者有之妻と成男子無之ゆへ

有之太之御書面相揃仕承上ニ豊

後儀死跡令請住居仕候以上

長尾晋庵

妻

日本政府圖書

内閣文庫

丑三月書

吉村真良
伊藤篤敬　校

国立公文書館
National Archives of Japan